



キャリア教育の 今後を展望する

全国高等学校進路指導協議会事務局長
東京都立晴海総合高校 主幹教諭

千葉吉裕

1961年東京生まれ。東京理科大学大学院理学研究科修了。現在、全国高等学校進路指導協議会事務局長も兼任。文部科学省中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会作業部会委員。共著に『キャリア教育の系譜と展開』（雇用問題研究会）『キャリア教育概説』（東洋館出版社）など。

現場発

これからのキャリア教育

キーワードは「変化対応」。

トップダウンの時代は終わった

全国高等学校進路指導協議会事務局長であり、高校でのキャリアアカウンセラーの草分けとして、長年キャリア教育に携わる千葉吉裕先生に、これからのキャリア教育の在り方などについてうかがいました。

取材文／清水由佳 撮影／竹内弘真

社会の大きな変化の中で、
学習意欲を高める
重要性が増す

かつて日本の高度経済成長を支えていた第二次産業。その全盛期には、良い大学から良い会社へ、そして会社でも上から言われたことをきちんとやっけていくことで人材が育成される時代でした。そのため、子どもたちにも「とにかく勉強さえしていればいいよ」という時代を作ってしまった。しかし、知識基盤社会への移行に伴い、もっと創造的なことをしていかななくてはいけないと、個性の重視や、自ら生涯にわたって学び続けるという生涯学習へとシフトが行われました。でも、そんな価値観を受け入れる土壌がなかつ

たため、この20年間、過去を引きずっている詰め込み型の先生と、個性重視の教育が教育現場でのねじれ現象を引き起こしてきたと思います。

しかし、科学技術やITの進化、グローバル化の加速など、現実社会はものすごいスピードで変化し、学び続ける人でなければ変化に対応していくことはできません。そして、教育現場は、この変化に急速に対応せざるを得ない状況にあります。大学はすでに変革を始めていて、入試も様変わりしました。大学全入時代になってきて、もう受験が子どもたちの学習のモチベーションにはなくなっている。それを痛感されている先生は大勢いらつしやると思います。そんななかで、どのように学習意欲を高めるか試行錯誤

してきたわけですね。いまや、「いずれ役に立つ」という曖昧な理由では生徒は動きません。身近にはSNSやゲームなど、おもしろくて夢中になる対象があるのですから。

これからますます、社会の中で生かせる学問を知ったり、大学での学びを知るなど、知の連続性として今の勉強をとらえる機会を作っていくことが非常に重要になってきます。社会がわかり、そこに自分がこうかかわりたいという意志が芽生えれば「今、確かにこれをやっておかなければいけない」という意欲がわくでしょう。それが、本来言い続けられてきた生涯学習時代のキャリア教育。未来に向けて自発的に学び続ける人を育てる教育が、ますます大事になってきます。「意欲を喚起し、自己成長できる生徒を育てる」それがこれからのキャリア教育の目的と言えるでしょう。

ある日突然、爆発的に キャリア教育が広がる

「キャリア教育」という言葉自体は、やっとなじみ浸透してきました。そして、全国のあちこちで、個人的な取り組みとして授業の中でキャリア教育を実践されている先生が出てきています。

アクティブラーニングや学び合い、ICTを使った学習など、さまざまな授業方法の変革が起っています。また、総合的な学習の時間も、行事の準備や単なる体験で終わるのではない探究的な学びが広がっています。以前であれば、そういう実践事例を知るには、時間もかかりましたし、横のつながりを持ちづらかった。でも今は、ネット上にいろいろなプラットフォームができていて、情報共有もしやすい。ある先生が実践してみたことをネット上に書き込むと、会ったことはないけれど同じ思いを抱いている先生が見て、自分も実践してみてもその結果を共有し、情報が広がっていく。高度情報化社会ならではの情報共有ですね。そうやって、あちこちで火花がポツポツと散っていたものが大きな爆発になり、ある日突然がらりと変わる。そんな予感がしています。

従来のような、学校単位、市区町村単位といった上から降りてくる変化ではなく、個人で積極的に授業改革する先生たちのつながりによって、全国に大きく広がると思います。

そういうキャリア教育における進路指導の役割としては、いかに先生たちの授業を支援していけるかが重要

になると思います。イベント的な催しをすればいいのではなく、授業の中で各先生たちがキャリア教育を考えていく支援をしていくことが大切になるでしょう。

オリンピックと地域創生 待ったなしの変革です

もう一つの大きなキーワードが、「地域の人材育成」です。特に、5年後に迫ったオリンピックは、その大きな起爆剤になるでしょう。オリンピックのために、世界中から人がやってくる。その人たちがいかに地域に呼び込みリピーターになってもらうか。地域創生のキーワードとして、今盛んに議論されていることです。今回のオリンピックは、単なる東京でのお祭りではありません。地域創生の大きなカギを握っている一大プロジェクトなのです。

地域創生とからめながら、雇用を作り、産業を作り、地方のプロジェクトを作っていくかなくてはいいけない。そこで急務となるのが、若い世代の人たちがいかに考え、行動していけるか。そういう人材育成です。それが、これからのキャリア教育で重要なPBL（Project-Based Learning: 課題解決型学習）につながっていくわけですね。

自己成長ややる気を引き出す モチベーターとなる

オリンピックはもう5年後です。だからこそ、待ったなしで、現実的なキャリア教育を行っていくことが大事です。

「何をやるか」「どのようなプログラムを行うか」といった方法論が中心でした。しかし、これからは価値観形成や自己成長できる個人となるための意欲をいかに支えるか。モチベーターとしての役割が大きくなると思います。ティーチャーがコーチとなり、モチベーターとなる。そんな変化を遂げていくと思います。

そのため、進路指導として実際に行うインターンシップや将来を考えるプログラムなど、計画や方法はあまり変化しないかもしれませんが、そこで何を伝えるのか、どう伝えるのかなど、ねらいが大きく違ってくると思います。単なる職業理解や進路選択のための進路指導ではなく、未来を自ら切り開いていく、周囲の人や家族、社会のためにいかに自己成長していくか、そんなやる気を引き出すための言葉かけやねらいを作っていくことが、今後は大事になるでしょう。